

2. 事業の概要と成果	
(1) プロジェクト目標の達成度 (今期事業達成目標)	ルサカ州ルサカ郡チパタ地区およびチェルストン地区において結核の早期発見・診断・治療・患者支援体制が強化される。 2年次の成果: 2年次の対象地での結核疑い患者数は11,148名で、2年次の目標値(7,483名)を大幅に達成した。一方、結核の治療脱落率は前年値3.3%から悪化し4.3%であった。 開始時に比べ対象地の結核疑い患者数が年間10%増加し、治療成績が悪化しない。(参考値:1年次の対象地の結核検査受験者数2,254名、治療脱落率3.3%)
(2) 事業内容	1. 保健医療施設での結核対策の強化 1-1. 結核菌検査の強化 ● 機材供与 2台の結核のPCR検査装置(GeneXpert)を予定通り供与・設置し、現在稼働中である。1台はコロナ禍による物流の停滞の影響で納品が遅れていたが、12月にムテンデレHCに設置、稼働した。 ● GeneXpert研修 9月14日から17日まで、臨床検査技師を対象にGeneXpert研修を開催した。講師は、Chest Disease Laboratory (CDL、胸部疾患検査室)の生物医学の専門家が務め、臨床検査技師20名が受講した。感染予防対策のため、参加者を10名ずつ2グループに分け、実質2日間の研修プログラムを2回に分散させて実施した。 ● 結核菌顕微鏡研修 2月1日から19日まで、喀痰の結核菌塗抹検査における検査技師の技術向上を目的とし、結核菌顕微鏡研修を胸部疾患検査室(CDL)で実施し合計25名の参加者が受講した。当初は本邦より講師を派遣予定であったが、渡航制限により講師派遣ができずCDLとザンビア大学教育病院(UTH)の講師が現地での手技など実地での講師をつとめ、日本人専門家とオンラインで繋ぐことにより、一部、日本人専門家による遠隔指導を組み合わせた。日本人講師と現地講師が事前に研修内容をすり合わせ、実施方法につき検討を繰り返したこと、評価を日本人講師が行えたことにより、研修の成果は保持できた。感染予防のため、参加者を3グループに分け、それぞれ5日間のプログラムを3回に分散させて開催したが、少人数で実施できたというメリットも感じられた。研修のタイムテーブルの管理が現地講師任せになる点においては、遠隔で研修を実施する難しさがあったが、3年次は追加の現地スタッフの配置などにより対応したい。 1-2. X線撮影設備及び能力の強化 ● X線機器機材整備 X線機器の保守契約を結び、定期メンテナンスを受けたところ、X線撮影台の一部に不具合が見つかったため、部品を南アへ発注した。3年次、部品が届き次第取り換えを行う。 ● X線撮影研修(良質な胸部X線画像セミナー) コロナ禍のため講師が渡航できず、対面での研修が実施できなかった。代わりに、3月19日、カリングリンガHCの放射線技師4名を対象にオンラインセミナーを開催した。セミナーでは、「良質な胸部X線画像」をテーマに、画像、デジタルX線装置の特性の理解を深め、活発な意見交換が行われた。 ● X線機材保守点検研修 3月9日から11日まで、デジタルX線装置の保守メンテナンス研修を実施し、ルサカ郡保健局医療機器エンジニアがX線装置の保守点検に必要な基本的な知識や技能を習得した。ルサカ州保健局エンジニア1名も参加した。南ア在住講師の渡航が最後まで危ぶまれたが、最終的に実技研修を実地で開催できたのは幸いである。X線機材をプロジェクト終了後も現地の技術者主導で長く使い続けるためには必須の研修であり、装置のカバーを外して普段見ることができない配線や基盤のデモンストレーションを行うなど興味深い内容は参加者からも高く評価された。 1-3. X線読影能力の強化

- 胸部X線読影研修

コロナ禍のため研修講師が渡航できず、対面での研修が実施できなかった代わりに、10月、11月、翌2月、3月に胸部X線読影研修を遠隔にて実施した。計25名の医師、クリニカルオフィサーが参加した。10月、11月は基礎研修として講義や筆記テスト、X線画像の討論会により参加者の理解度、習得度を測定した。翌2月、3月は、参加者からの要望を受けて追加で開催した発展的な演習で、デジタルX線装置が供与されたカリングリングHCで撮影された胸部X線画像や新型コロナウイルス感染症症例を教材としても用い、主に症例検討に重点を置いた内容であった。

1-4. 患者治療管理の強化

- 結核外来の環境整備

HCの中には結核外来の円滑な運営に必要な備品や記録用紙が不足する施設があったので、破損した体重計や在庫の切れた記録台帳の印刷を行い支援した。

1-5. 記録、報告の強化

- 結核レビュー会議の開催

下半期の結核レビュー会議を3月4、5日の2日間で開催した。レビューのためのサイトビジットは感染予防の観点からやむを得ず中止した。集会の自粛措置により、3ヵ月ごとにレビューを実施する計画を半年に1度の開催に減らしたが、その結果、半年以上前のことを振り返るには時間が経ちすぎて覚えていないことも多かったため、3年次は四半期ごとの開催に戻す。

当会スタッフが行っている施設への定期的なデータ収集は、コロナ禍でも継続して実施することができた。これにより、HCの状況や結核対策への影響を直接把握することにつながった。

- 台帳・治療カードの印刷等

保健省ヘルスプロモーション課の協力のもと改訂した結核の小冊子を40,000冊印刷した。これらは家庭訪問や患者訪問で配布された。また、結核ボランティア用の必携書(TSハンドブック)の情報が一部古くなっていたためその内容を補足するため、別刷り版を150冊印刷し、ボランティアや関係者へ送付した。さらに、施設の要望に応じて、記録用紙や患者カードを印刷し、配布した。

改訂を予定していた報告様式(結核や地域保健関連)の改訂作業は、コロナ禍での作業の遅れのため一部印刷に至らなかったため、3年次にフォローアップする。

- アニュアルプロジェクトレビュー会議

3月25日、プロジェクトの1年の活動を振り返るプロジェクトレビュー会議を開催した。一部、Zoomで中継することで、会場に直接来ることのできない方や体調不良のスタッフも自宅から参加することができた。また、各施設のこの1年間の努力や向上をたたえ、施設ごとの特徴や強みをカテゴリー化して表彰したことは各施設の担当者のモチベーションの向上につながった。

- オペレーショナルリサーチ

カリングリングHCで実施されたオペレーショナルリサーチが雑誌に掲載された。カリングリングHCでは過去、治療成績が悪かった。そこで、治療成績を台帳、患者カード、検査室台帳等を基に再評価し、転出者については転出先HCへ出向いて照合した。その結果、治療成績を評価できた患者の割合は55%から96%に上昇、治癒率は44%から58%へ、治療完了率は44%から58%へ上昇したことがわかった。治療成績の悪いHCについては同様な再評価が必要と考えられる。本研究結果は保健省や関係者に共有されたほか、4月3日にオンラインで開催された国際保健医療学会東日本大会で口頭発表された。

DOI: <https://doi.org/10.5588/pha.20.0059>

2. 地域での結核対策の強化

2-1. 結核ボランティアの育成

コロナ禍の影響で新規ボランティアの育成の開始が遅れたが、新しくンゴンベHC、チェルストンHC、カウダスクウェアHCにおいて合計50名の結核ボランティアを育成し、全員が3つの初期研修(結核とHIVの知識研修、ドラマ・パフォーマンス研修、HIVカウンセラー養成研修)を受講した。チャザンガH

	Cにおいてはリフレッシュ研修を実施した。 2年次終了時点でアクティブに活動するボランティア70名おり、このうち育成時から継続して参加しているボランティアは60名になる。なお欠員は都度補充されている。活動を中止したボランティアの活動中断の理由としては、Neighborhood Health Committee (NHC, 近隣保健委員会)との兼任を避けるため、就職、進学、遠方への引っ越しが含まれる。 2-2.結核ボランティアの活動支援 ● 地域啓発活動 コロナ禍による集会制限のため、地域集会を開催する代わりに、ボランティアがペアを組み家庭訪問を通じて啓発活動を行う方法に変更した。従来型の啓発劇とは異なり、個別訪問では対面による知識の伝達が中心となることから、質疑への回答の正確性を担保するため、研修などでボランティアが正しく答えられなかった項目を後日看護師に確認するなどしてフォローアップをしている。従来型のような大人数への伝達はできなかったが、家庭訪問を個別に行うことで、よりニーズの高い層へ手厚い情報提供ができたという利点もあった。 ● 世界エイズデー、世界結核デー オンラインで開催された世界エイズデー(12月1日)、世界結核デー(3月23日)にオンラインで参加した。また、ボランティアや施設スタッフが着用するTシャツを作成し、配布した。Tシャツは地域活動においてボランティアの身分証のかわりになるため安全管理の観点からも重要である。 2-3. 結核ボランティアの定着支援 ● 生活向上研修(小規模ビジネス研修、園芸研修) 生活向上研修およびリフレッシュ研修を12月、2月に開催した。園芸研修では、初めての試みとしてルサカ郡農業局の栄養士が講師に加わり、研修内容に栄養、食品加工や保存の実演指導を取り入れた。また、園芸活動で育てた野菜を販売できるよう、小規模ビジネス研修の内容を工夫し、両方の研修につながりを持たせた。 ● 小額融資委員会 新しく育成された3サイトで小額融資委員会を立ち上げ、専用口座を開設した。少額融資の原資金を送金した。(原資は自己資金から支出) ● モニタリング 2020年3月末現在、4サイトのうち、チャザンガHC、カウダスクウェアHC、チェルストンクリニックのボランティアがローンを受けている。ンゴンベHCは4月から貸付が始まる予定。
(3) 達成された成果	【指標1】2年次第3四半期2,616名、第4四半期3,010名 【指標2】2年次第3四半期4.5%、第4四半期2.7%(注1) 【指標3】2年次第3四半期0、第4四半期0(注2) 【指標4】2年次第3四半期99.8%、第4四半期99.8% 【指標5】2年次第3四半期100%、第4四半期100% 【指標6】2年次第3四半期3,307、第4四半期10,727(注3) 【指標7】2年次第3四半期97%、第4四半期90% 【その他】 (注1)不備のあった結核台帳の情報が修正・更新されたため、2年次第2四半期の治療脱落率は4.6%から4.3%に訂正する。 治療脱落率の改善には、ボランティアの育成による丁寧なモニタリングが功を奏したこと、結核レビュー会議を通じて治療脱落者を減らす試みを関係者が話し合い、改善策を講じたことが背景にあると考えられる。 (注2)2年次中間報告では未実施と報告したが、2年次第1、2四半期のEQAが後日実施され、いずれもゼロだった。 (注3)第3四半期は、3サイトで新しく結核ボランティアを育成中だったため、チャザンガHCにおける戸別訪問、ヘルストークの実績数を反映している。第4四半期半ばから新3サイトでのボランティア活動が本格化したため数が増加した。

(4)持続発展性	● 当会が作成したTSハンドブックを結核対策課(NTP)が中心となり改訂する計画があるため、3年次の活動としてフォローアップし、ハンドブックの改正、全国配布に協力したい。 ● 遠隔で実施した胸部X線読影研修について、結核対策課から対象者や地域を増やしてほしいというリクエストが上がっている。国内のX線撮影施設が増えていることや、読影研修を実施している団体が現時点では当会以外にないことが背景にあると思われるため、3年次の研修方法を工夫したい。
----------	--